

ジョン・ダンのパラドックス

——中期の宗教詩の場合⁽¹⁾——

久野幸子

〔1〕

ダンの詩のパラドックスに注目し、彼の詩的言語を声高く称賛したのは、今世紀二十年代の T. S. Eliot と、Cleanth Brooks を始めとするいわゆる新批評の面々であった。彼等の間でのダン崇拜は、四十年代までにほとんど納まったように見える。が、「ダンの名声は、我々の名声の失墜に伴って失墜するであろう」というエリオットの『ダンに捧ぐる花輪』⁽²⁾での不吉な予言に反して、一般のダンに寄せる関心は、依然衰えをみせず、その後彼のエレジー、宗教詩、説教、諸散文等が、次々と編集され、出版されている。そして近年は、ダンを“preacher of paradox”とか、“master of paradoxy”等と表現しつつ、そのパラドックスを、ブルックス達のように、“figure of speech”（表現のあや）としてとらえるのではなく、“figure of thought”（思想のあや）としてとらえ、恋愛詩だけに限らず、彼の生涯と全作品中に、その魅力と重要性を探るといった方向に、研究が進んでいると思われる。

確かにダンには、種々な意味において、パラドキシカルな存在であった。まず彼はその生涯に、放蕩で無頼な恋愛詩人から、篤信にして博学なる大神学者、大説教者へという、一見パラドキシカルな大転回を成し遂げている。しかも、各々の時期を代表する作品を詳しく検討すると、若い頃書いた恋愛詩の多くが、その本質において宗教的傾向を帯びており、かえって後年の説教集に、俗臭がふんぷんとしていることに気づく。次に他の作品を取り上げてみても、*Paradoxes and Problems*『逆説と問題』や *Biathanatos*『自殺擁護論』等の散文

作品は、多くの研究者の指摘を待つまでもなく、あきらかに、伝統的なジャンルの一つである、いわゆるパラドックスの習作であったと考えられる。又、*Epigrams*『警句集』や、“The Progresse of the Soule”『魂の遍歴』というおよそ奇妙な未完の詩も、結婚から聖職叙任にいたるダンの中期の最大の作品と言われる *The Anniversaries*『周年追悼詩』も、各々、読者にパラドクシカルな印象を与えずにはおかないのである。

しかしながら、以上述べたようなパラドックスとの強い結びつきは、当時、何もダンだけに限られたものではなかった。我々はここで、まず、ダンが生きたのは、時代の精神そのものが、中世のスコラ哲学から、近世の科学的合理主義へと、大きく変動していた分裂の時期であったことを、思い出さなければならぬだろう。*Seventeenth-Century Prose and Poetry* の編注釈者、R. P. Coffin は、この時代を “the century of paradoxes” と表現しているが⁽⁴³⁾、確かに、文芸復興と宗教改革という二大変革を経て、種々な主義主張が入り混じり、宗教紛争や内乱の続いた不安で不穏なこの時代に、パラドックスが、著しく人々の間で流行したのは、極めて当然のことであったと思われる。一昨年 *Paradoxia Epidemica*『逆説病理学』を書いた R. L. Colie は、その中で、流行の原因として、上に述べた時代的不安の他に、当時 “intellectual speculation” が進んでいたこと、古典研究や三学芸が復活していたこと等もあげている⁽⁴⁴⁾。が、いずれにしろ、当時、パラドックスは、ダンだけではなく、多くの文人たちに好まれ、もてはやされていた一ジャンルであり、一思考形態であったようである。それ故、Erasmus の *The Praise of the Folly*『痴愚神礼讃』、Sir Thomas Brown の *Religio Medici*『医者への宗教』、Robert Burton の *The Anatomy of Melancholy*『憂鬱病の解剖』等の散文や、G. Herbert, Marvell, Crashaw 等の他の形而上詩人達の作品中に、我々はパラドックスだとか、パラドクシカルな考え方を、かなり容易にみつけだすことができるのである。

がしかし、それらの文人達の中でも、特に質的にも又量的にも、そのパラドックスをきわだたせていると思われるのが、ダンなのである。彼は書簡集等か

ら推察すると、しばしばパラドクシカルであろうとする誘惑に克てず、又人一倍パラドックスを好み、もてあそんでいたらしい⁽⁵⁾。とすると、作品中にみられる多くのパラドックスのうち、ダンにとって、どれが本質的なものであり、どれが慣習的なものであり、又どれが遊びであったのであろうか。言い換えれば、それらのパラドックスは、ダンの内面にとって、各々一体どのような意味を持っていたのだろうか。以下本稿で、私は、彼の内面生活が、前・後期における以上にパラドクシカルであったらしい中期にその多くが書かれ、当時の彼の苦悩を最もよく反映していると言われている宗教詩をとりあげ、それらの中にみられるパラドックスを検討してみたい。

が、ここで、検討し始める前に、まずパラドックスという少々あいまいな用語を私なりに定義し、又宗教詩中のどの作品を中心にとり扱うかについて、ごく簡単にふれておく必要がある。パラドックスとは、語源的にはドグマにパラしているものという意味で、普通訳されている「逆説」の他に、「誑説」という意味も含まれている。がここでは、一応「通常の信念や見解に背き、自家撞着と思われるが、実は真理を表わす正しい説」という、「逆説」としてのごく一般的な定義を採用しておく。何故なら、今から私は、パラドックス相互間どのような論理的相異があるかにではなく、ほとんどすべてその発想の発端は“rhetorical”であるパラドックスという概念が、人間存在の真実と、どれ程深くかかわりあっているかに焦点を絞りつつ、パラドックスを論じていきたいと思うからである。扱う宗教詩は、執筆時期が、おおよそ推定でき⁽⁶⁾、しかも重要な作品ということで、1607年に書かれた“La Corona”「キリストに捧ぐる冠」、1608年秋に書かれた“A Litanie”「嘆願」、1609年から1611年にかけて書かれた“Holy Sonnets”「聖ソネット」19篇中の16篇に限りたいと思う。

〔2〕

さて、上にあげた宗教詩中にみられるパラドックスの中で、まず、第一に目につくのは、神性及びそれに関連する、人間の悟性では探求できない、宗教的真理

を表わしているパラドックスである。これを私は、ここで便宜的に “paradox in divinity” (神性におけるパラドックス) と呼んでおく。 “La Corona” 中に認められる神への “All changing unchang’d Antient of dayes,” (すべてに変えられる不変の神よ) という呼びかけ、十字架にかかられたキリストについての “When it beares him, he must beare more and die.” (十字架が彼を支えるとき、彼はさらに多くを負って死なねばならぬ) という叙述、あるいは、 “A Litanie” 中にみられる Trinity (三位一体) の教義の “you distinguish’d undistinct” (あなた分かれた分けられぬもの) や、 “you unnumbered three” (あなた数えられぬ三つのものよ) 等の表現は、このパラドックスのほんの数例である。では、これらのパラドックスは、詩の中で実際にはどのように扱われているのだろうか、又如何なる役割をはたしているのであろうか。これらの問いに答えるため、宗教詩中で最も初期に書かれ、このパラドックスが特に多く認められる “La Corona” というイエス・キリストの生涯をテーマとした七篇からなる sonnet sequence 中の一篇を、次に引用してみよう。

2. “Annunciation”

*Salvation to all that will is nigh,
That All, which alwayes is All every where,
Which cannot sinne, and yet all sinnes must beare,
Which cannot die, yet cannot chuse but die,
Loe, faithfull Virgin, yeelds himselfe to lye
In prison, in thy wombe; and though he there
Can take no sinne, nor thou give, yet he’ll weare
Taken from thence, flesh, which deaths force may trie.
Ere by thy spheares time was created, thou
Wast in his minde, who is thy Sonne, and Brother,
Whom thou conceiv’st, conceiv’d; yea thou art now
Thy Makers maker, and thy Fathers mother,
Thou’ hast light in darke; and shusts in little roome,
Immensity cloysterd in thy deare wombe.*

2. 「受胎告知」

(大意)

救済を望む全てのものにその日は近い、
 常にあらゆる所にいらっしゃる、全てでおありになる御方、
 罪を犯すはずがないのに、全ての罪を背負わねばならない御方、
 死ぬはずがないのに、ただ死ぬことしか選べない御方、
 みよ、信仰に篤い乙女よ、その御方が牢獄、貴女の子宮に御身を
 委ねられるのを。その御方はそこでは罪をお受け取りになることも
 できないし、貴女も与えることができないのだけれど、だがそこから
 肉をおとりになって身にまとわれるであろう、死の力が肉をためすように
 と。

天球の回転によって定まれる時が、創造される以前に、貴女は、
 貴女の息子であり、兄弟であり、貴女が孕みたまう御方の
 心の下に生まれていらしたのだ、実に貴女は今や
 貴女の造り主の造り主であり、貴女の父親の母親である、
 貴女は暗闇に光をもち、それを小さな部屋に閉じこめている、
 無限が貴女の貴重なる子宮に閉じこめられている。

この受胎告知を歌ったソネットには、第三・四行目（罪を犯すことができないのに、罪を背負わねばならぬキリスト、死ぬはずがないのに死ぬことしかできないキリスト）、第十二行目（貴女の造り主の造り主、貴女の父親の母親）、第十三・四行目（暗闇に光を持ち、無限を有限のうちに閉じこめる）等に、はっきりと神性のパラドクシカルティが強調されている。しかしながら、1952年に宗教詩のすぐれた版を出したダン研究の権威 Helen Gardner が指摘しているように⁽⁷⁾、これらのパラドックスは、中世の詩や、*Prymer* 等の祈禱書にはよく見られる、多分に伝統的、慣習的なものである。その上、ソネット自体が、かなり形式的に、又客観的に書かれているせいもあって、これらには、あまりダンらしさを感じられず、従って、人々の興味を強くそそることはないと思われる。J. B. Leishman は、このソネットを書くダンの態度を、“trying to stimulate his faith by means of intellect”（知力を用いて信仰を促そうとし

ている)と評したが⁽⁸⁾、確かに、執筆の動機や目的から考えれば当然とは言え、この作品は、“intellectually”に、又“wittily”に書かれ過ぎている。それ故、これらの paradox in divinity は、このソネットの中で、修辭的役割を第一の目的としており、しかもそれら自身として発展させられていることが少ないだけに、ダンの内面、あるいは宗教的体験とは、ほとんどかかわりあいを持っていないと思われる。パラドックスとして形は整っていたとしても、又どれ程適確、簡潔に教義を表現していたとしても、これらは、ダンの魂にとって、特に本質的なものではなかったと言えよう。

ところが、上で引用したように、“A Litanie”の中で、“you unnumbered three”とのみ表わされていた Trinity というパラドックスが、驚くべき巧みさで、詩の主題や内容と深く結びつきつつ、見事に発展させられている例を、我々は、“Holy Sonnets”中の次の一篇、“Batter my heart, three-person’d God;…”(私の心を打ち砕いて下さい。三位一体の神よ……)に発見することが出来る。

“Holy Sonnet XIV”

Batter my heart, three-person’d God ; for, you
 As yet but knocke, breathe, shine, and seeke to mend ;
 That I may rise, and stand, o’erthrow mee, and bend
 Your force, to breake, blowe, burn and make me new.
 I, like an usurpt towne, to’another due,
 Labour to’admit you, but Oh, to no end,
 Reason your viceroy in mee, mee should defend,
 But is captiv’d, and proves weake or untrue,
 Yet dearly’I love you, and would be lov’d faine,
 But am betroth’d unto your enemy,
 Divorce mee, ’untie, or breake that knot againe,
 Take mee to you, imprison mee, for I

Except you'enthrall mee, never shall be free,
Nor ever chaste, except you ravish mee.

「聖ソネット・第十四番」

(大意)

私の心を打ち砕いて下さい。三位一体の神よ。何故なら、貴方は今はただ軽く打ち、そよぎ、輝き、そして私を縛おうとなさるだけです。私が起き、立ち上がれるように、私を倒して下さい。そして貴方のお力によって、破り、吹き、燃やして、私を新しくして下さい。私は正当な持ち主がありながら、奪いとられた町のようなもの。貴方を招き入れようとしながら、しかしそれもできないのです。私の中の貴方の副官である理性は、私を防御する役にありながら、捕えられ、力弱く、頼りないものとわかりました。だが私は貴方を深く愛し、切に愛されたいのです。それでいて貴方の敵と婚約させられているのです。私を離縁させ、あの結び目を解くか、断ち切るかして下さい。私を貴方のもとへつれてゆき、拘禁して下さい。何故なら私は貴方が奴隷にして下さらなければ、決して自由ではなく、純潔でもあり得ないのです。貴方に凌辱していただかなければ。

このソネットは、全般にわたって、ドラマティックだといわれている“Holy Sonnets”の中でも、特に力強く、又緊張度の高い作品だと思われるが、この特質は、第一行目に示されている神の Trinity, すなわち“three-person'd”というパラドックスと、決して無縁ではない。それどころか、この“three-person'd”は、父として、御子として、聖霊として、三層において人類に対してお働きかけになれる神の御力の強大さを、“Batter”という battering-ram (城壁破壊用の槌)を連想させ、包囲攻撃のイメージを伝える衝撃的な動詞と共に、まず第一行目から、我々に印象づけようとしている。そしてこの神の人類に対する限りのない恩寵を、ダンが、全身全霊をもって受けとめようとしていることは、ソネットを読み進むにつれ、徐々に明らかになってくる。ダンはその真摯な祈りの中に、Power (力)を象徴する父なる神には、彼の心を

“knocke”するだけでなく、“breake”して下さるよにという、Comfort（なぐさめ）を象徴する聖霊なる神には、“breathe”ではなく“blowe”して下さるよにという、そして Love 又は Light（愛又は光）を象徴する子なる神には、“shine”ではなく、“burn”して下さるよにという、各々への切なる願いを述べている。勿論、我々は、A. Clements の主張するよに⁹⁾、ダンが“the Father”, “the Son”, “the Holy Ghost”という普通の順序を、“the Father”, “the Holy Ghost”, “the Son”と換えたことよ、各々の動詞にそなわる聖書的含蓄を十二分に活用させ、それぞれの“person”の働きに、他の“person”のそれも含ませ、“the paradox of three-in-one”を、より適切に表現していることにも気づかねばならないだろう。がいずれにしろ、このソネットは、どのように伝統的なパラドックスも、ダンの手にかかれば、極めて個性的な機能を發揮するものに変えられてしまうという、重要な事実を示していると思われる。

しかしながら、この「聖ソネット・第十四番」における中心的パラドックスは、実はこれではない。それは、“the paradox of death and rebirth”（死と復活の逆説）、あるいは“the paradox of destroying in order to make whole”（全きものにするために破壊するという逆説）とでも名づけられるべきものである。このパラドックスを、私は、人間の moral な側面にかかわっている、つまり、人生を如何に生きるべきかの問いと深く関連しているという意味において、今後、“moral paradox”（倫理的パラドックス）と呼ぶことにしたい。

さて、このパラドックスが、キリスト教における主要なパラドックスの一つであり、神と人々との奴隷であることよ、真の自由を得ることを願ったイエス・キリストや、使徒パウロにおける根本的パラドックスと、ほぼ同質のものであることは言うまでもないだろう。しかしながら、ダンのこのパラドックスの表現は、かなり特異で、かつ絢爛としたものとなっている。まず第三行目で、“rise”と“stand”にたいして“o'erthrow”という動詞が意識的に用いられることよ、始まったこのパラドックスは、octave に続く sestet にお

いて、次第に盛りあがりを見せ、末尾で、特にショッキングな言葉を用いた couplet によって、ものの見事に締めくくられている。

ところで、この末尾での逆転という pattern は同じようにアングリカンの牧師となった George Herbert の “The Collar” 「首輪」と題する宗教詩にも見出される。が、両者の詩が共に同種のパラドックスをテーマとしていながら、ダンの詩だけが、ハーバートの詩に比べて、我々に幾分不快で不都合という感情を抱かせるのは、ダンの用いた、神と人間との婚姻というメタフォアや、“imprison”, “enthrall”, あるいは “ravish” 等の強い言葉を、宗教詩の中にみることが、もはや我々二十世紀の人間の好みにあわなくなったことも原因となっていよう。しかし根本的相異は、詩の面にあらわれている二人の宗教的体験の違い、つまりハーバートにみられる神への篤い信頼の上に成り立つ心の “tranquillity” (静穏又は平穩) がダンには欠けていたことに由来していると思われる。当時のダンには、神の恩寵への信頼よりもまず、自らが罪深いという、そしてその罪深さ故に到底救われ得ぬものであるという強い劣者意識があり、その意識が彼にこのように激烈なソネットを書かせたのだと云えるのではないか。ここで、我々には、この moral paradox が、単なる飾りとしてではなく、十分にその機能を果たしていることが納得されよう。このように、三位一体の神によって、有無を言わず、破壊され、強姦されることによってのみ、絶望の底に沈み、墮落している自らの魂の純潔が保たれ得るというパラドックスは、ダンにとって、格別重大な意味をもっていたに違いないのである。

とは言うものの、このパラドックスとダンの内面とのかかわりあいを、更に一步押し進めて考えてみると、何かまだ素直に直結させることができないという気がするのも、否定できない事実である。これは、このソネットが、Ignatius Loyola の *The Spiritual Exercises* 『心霊修業』を用いて書かれた黙想詩であり⁽¹⁰⁾、又 Petrarchan Sonnet として形の整ったものであるので、その為かそこにかかなりの self-dramatization (自己劇化) や exaggeration (誇張) が認められるということと、関連があるようである。この “histrionic” なソネット

のドラマを、Clay Hunt はメロドラマと評したが⁽⁴¹⁾、それ程までに酷評しないとしても、我々はやはりここにわざとらしさを感じないではいられない。なるほど、この moral paradox は崇高な宗教的境地を提示してはいる。が、それは故意に方向づけられた希望の状態であって、現実そのものではないのである。従って、このソネットのこのパラドックスは、如何に生きるべきかのモラリストティックな問題におけるダンの内面的真実に、もう一步というところまで近づきながらも、まだ本当につながってはいないと言えると思う。

ところで、この moral paradox の例は、この他、“Holy Sonnets” 中には多く見られ、例えば、第九番 “If poysonous mineralls, and if that tree,” (もし有毒な鉱物や、そしてもしあの木が) には、神への冒瀆的な態度と、そういう態度へのパラドクシカルな悔い改めという型で認められる。がこのパラドックスにも同じように意識的姿勢が目立ちすぎ、やはり物足りなさを感じさせるようである。

しかしながら、この物足りないという我々の不満を、かなり満たしてくれると思われるのが、1608年の秋、ダンが苦悩のどん底でもがいていたと言われる頃書かれた、“A Litanie” 「嘆願」という28スダンザからなる信仰の詩である。嘆願とは、第一義的には、教会で司祭と会衆との間で交互に唱えられる祈禱の一つの形式を意味するので、この詩には慣習的部分もある。が、大半の部分はきわめて personal であり、ダン自身を反省しつつ、神にゆっくりとお祈りを献げるといふ形式の中に、自らの心の苦しみと悩みとを表現している。が注目すべきことは、その表現のしかたが、やはりパラドクシカルなものになっているということであろう。つまり、この詩全体の中心的トーンである、すべての事柄において “mean” (中庸) であろうとする切なる願いは、ダンが実際生活において、しばしば “excess” (過多) の状態に落ちこみがちであったことを、暗に示しているのである。無論、この詩には、このパラドックスの他に、

先にもふれたように、paradox in divinity に属するものも少々あり、又信仰と理性、神への奉仕と世俗的生活、“wit”と“seriousness”等にかかわるさまざまな moral paradox やその他のパラドックスをみつけることができる。

がしかし、それらのうちで、最も重要と思われるのは、次に引用する第十スタンザに認められるものである。

X “The Martyrs”

And since thou so desirously
 Did'st long to die, that long before thou could'st,
 And long since thou no more couldst dye,
 Thou in thy scatter'd mystique body wouldst
 In Abel dye, and ever since
 In thine, let their blood come
 To begge for us, a discreet patience
 Of death, or of worse life: for Oh, to some
 Not to be Martyrs, is a martyrdom.

X 「殉教者達」

(大意)

そして貴方は、そんなにも熱烈に死をお望みに
 なられたのだから、貴方がおできになるずっと以前、
 そして、もはや死ぬことがおできにならなくなってからもずっと
 (万人に) 分け与えられた神秘的な身体における貴方は
 アベルにおいて死をお望みになり、以来ずっと
 貴方自身においてお望みななのだから、そういう人々の血が流れ、
 私達の為に死か、あるいは死よりもさらにつらい人生に思慮深く
 耐える力を嘆願するのをお許し下さい。何故なら、ああ、ある者にとっては、
 殉教者にならないことが、殉教なのだから。

というのは、この最後の二行にみられる「ある者にとっては、殉教者にならないことが、殉教なのだ」というパラドックスは、当時の彼の苦悶する内面を、他のどのパラドックスより以上に、如実に表現していると思われるからである。この人生の深い心理をとらえた印象的なパラドックスを、私は paradox in

divinity や moral paradox と対比させて、自己の心理的眞実にかかわっているという意味において“psychological paradox”（心理的パラドックス）と呼びたいと思う。

さて、ここで我々は、このパラドックスが、ダンにとってどれ程本質的なものであったかを探るために、当時の彼の内面生活がどのようなものであったかを考えてみたい。

ダンが、ローマ・カトリック迫害の時代、母があゝの聖トマス・モアにつながるという英国有数のカトリック名門の出身であったこと、そして、神の道と人の道とについて、又カトリシズムとプロテスタンティズムとについて、随分長い間悩み続けたらしいことは、よく知られている。が、ダンが、いわゆる殉教者となってこの世を去らず、人生半ばでローマ・カトリックからアングリカンへと改宗してしまったのは、普遍受けとられがちなように、何も全く、出世し経済的にめぐまれたいという、世俗的利益の為だけだったのではないようである。勿論、人間としてそういう要求や欲望はあったに違いないし、ダンにおいては、それらが人一倍強いものだったのかもしれない。にもかかわらず、又一方、ダンは、幼い頃 Jesuit の教師達に教育されていた為か、あるいは、唯一人の弟や叔父を始め身近なものの中に多くの殉教者を出していた為か、死や殉教への強い誘惑を自覚することも、大変度々あったらしいのである。D. R. Roberts が“The Death Wish of John Donne”と題する論文の中で指摘しているように⁽¹²⁾、ダンが、死、自殺、そして殉教に対して、生涯、特別な関心を寄せていたらしいことを示す証拠は、詩、書簡、説教集中に散在し、その他の、*Paradoxes and Problems, Biathanatos, Pseudo-Martyr*『にせ殉教者』等の作品中にも、大変多く発見されるのである。一例を示せば、ダンは *Biathanatos* の序文で、自らの内に非常に若い頃から、死への願い、自殺への“sickly inclination”があったことを告白している⁽¹³⁾。

しかし、それだからといって、殉教者となってしまうには、ダンの知性はあまりに冷静でありすぎ、性格はあまりに込み入りすぎていたのではなかっただ

ろうか。ダンは、自らの心理のもう一つ下の層にも気づかずにはいられない人間であったし、気づいた以上、気づかぬふりもできなかった。彼には、殉教の苦痛の中に、ある喜びがひそんでいるという、パラドクシカルで、シニカルな人間の現実が、十分すぎる程、わかっていたらしい。その上、教義上の問題もあり、又病弱な妻と多くの子供をかかえているという夫・父親としての道義的責任もあった。そして、とにかく、ダンはいわゆる殉教者とはならなかったのである。いや、D. R. ロバーツが説くように、自らに死を招き得る“aggressive or destructive capacity”⁽¹⁴⁾を欠いていたが故に、殉教者となることができなかったというべきなのかもしれない。がいずれにしろ、そんな彼にとっては、殉教者となることより、むしろ、自らの内に殉教者になることができなかったという負い目を抱いて、そんな自分の弱さや惨めさに悩みながらも、なんとかこの辛い現世を生き続けることの方が、至難なことに思えたのではないだろうか。あるいは、そう思うことによってしか、まさに滅亡しかかっている自らの魂を、救うことができなかったのではないだろうか。

ここにおいて、我々は、このパラドックスがこの意味において、当時のダンの苦悩する内面に最も接近しており、従ってダンにとって、最も本質的なものであったと、結論できると思う。

[3]

確かに、パラドックスは、有限と無限とを結びつけ、それをういてしか表現し得ない貴重な真理を、我々に伝える重要な役割を果たしている。しかしながら、パラドックスには、それがどのようなカテゴリーに属しているものであれ、ある重大な危険が伴われていることも又、忘れてはならない事実であろう。今世紀におけるダンのすぐれた研究者の一人である Helen C. White は、ダンの若い頃のパラドックス熱愛を、

It was the need of a safety value for intolerable pressure within himself.

と説明し、これに続けて“intolerable pressure”を、生涯ダンの内に住み、彼と激しく葛藤し続けた強大なエゴと述べている⁽¹⁵⁾。が、よく考えてみると、パラドックスは、このようにエゴ爆発への安全弁というような positive な役割を果たすものであると同時に、視点を変えてみれば、用い手のすべき行動や下すべき決断を抑制してしまう negative なものでもあったようである。パラドックスのこの negative な側面を、Joseph Duncan は“the idiom of the no-man’s land”⁽¹⁶⁾と、R. L. コーリーは“Paradoxical form denies commitment”⁽¹⁷⁾と、そして川崎寿彦先生は、「非行為者の雄弁」⁽¹⁸⁾と説明されている。

なるほど、ダンの生涯と作品におけるさまざまなパラドックスにも、そういう恐れは少なからずあったらしい。例えば、前期の恋愛詩中にしばしばみられる *contemptus mundi* (現世の軽蔑) は、かなり自己弁護的であり、中期における神学研究への異常な程の熱中は、ダンの、実践的宗教活動へ自らを投入しないことに対する、自らへの苦しい言い訳けだったような気もする。が、positive な役割を果たしたパラドックスも又あったと思われる。要するに、パラドックスは、その性質上、用い手の用い方によって、あるいは用いる姿勢によって、単なる知的くすぐりとなったり、詭弁となったり、又一方、人生の深い真実を的確に表現する重要なものとなったりするのではないだろうか。

そして私は、最後に、そのような危険性を十二分に考慮した上でなお、この殉教者達への祈りの中にみられるこの psychological paradox が、紙一重というきわどいところにあるにしろ、当時のダンの内面にとって、positive で、真の意味で貴重なものであったと主張したいと思う。何故なら、おそらくダンは、このパラドックスをもってしか、あの当時の苦悩を乗り切ることができなかったであろうし、更に、ダンが後年到りついた、人は宗派にこだわらず、教義よりも神への深い瞑想を生きる支柱とすべきだ⁽¹⁹⁾という、高い信仰の境地は、このようなパラドックスの多くに伴われつつも、苦しみぬいた中期を経て、はじめて到達し得る境地であったと思われるからである。

〔注〕

- (1) 本稿は1968年5月十七世紀英文学会関西研究会において口頭発表したものに一部補筆したものである。
- (2) T.S.Eliot, "Donne in Our time", *A Garland for John Donne* (Cambridge, 1931), T. Spencer, ed., pp. 3-19.
- (3) R.P.T.Coffin & A.M.Witherspoon eds., *Seventeenth-Century Prose and Poetry* (Harcourt, 1929), p.2.
- (4) R.L.Colie, *Paradoxia Epidemica* (Princeton, 1966), p.33.
- (5) E.M.Simpson, *A Study of the Prose Works of John Donne* (Oxford, 1948), pp.316-317 など。
- (6) 宗教詩の dating については Helen Gardner の説 (Helen Gardner, ed., *John Donne, The Divine Poems* (Oxford, 1952), pp. xxxvii-1) に従い、以下宗教詩の引用はすべてこの版から行う。但し「聖ソネット」の番号は Grierson 版による。
- (7) *Ibid.*, p.59.
- (8) J.B.Leishman, *The Monarch of Wit* (London, 1951), p.257.
- (9) A.C.Clements, "Donne's Holy Sonnets XIV," *MLN*, LXXVI, pp.484-489.
- (10) "Holy Sonnets" と *Spiritual Exercise* との関係については, L.L.Martz, *The Poetry of Meditation* (New Haven, 1954), pp.43-53, や Gardner, *op. cit.*, Introduction などを参照。
- (11) Clay Hunt, *Donne's Poetry* (Yale, 1954), p.136.
- (12) D.R.Roberts, "The Death Wish of John Donne," *PMLA*, LXII (1947), pp.958-976.
- (13) Simpson, *op. cit.*, p.167.
- (14) Roberts, *op. cit.*, p.973.
- (15) H.C.White, "John Donne and the Psychology of Spiritual Effort," *The Seventeenth Century* (Stanford, 1951), R.F.Jones and Others, pp.355-368.
- (16) Joseph Duncan, *The Revival of Metaphysical Poetry*, (Minneapolis, 1959), p.16.
- (17) Colie, *op. cit.*, p.38.
- (18) 川崎寿彦, 『ダンの世界』(東京, 1967), pp.157-159.
- (19) Gardner, *op. cit.*, p.xx を参照。